

随想

第十三代 吉 谷 源太郎

(一) 京三中・山城高創立百年に寄せて

私は昭和五十二年四月、校長として山城高に赴任しました。このたび、百年記念誌発刊にあたり、在職中に在ったことを少々述べ挨拶に代えたいと思います。私の前任校は乙訓高校で、こゝは阪急沿線開発に伴ない、旧長岡競馬場跡地に新設された高校でした。広大な校地、充実した教育施設の下に、全日制三〇学級（普十八、商十二）生徒数一、五〇〇人、殆どが進学希望。私はここで六年間校長職をしていました。

四月一日山城に着任、全日制教職員に挨拶後私は、井上教頭、佐野事務長に案内され、校舎内外を巡視しました。新設校の設備に慣れてきた私の目には本館廊下や木造中学校舎の破損状況、教職員トイレ構造の非常識さに驚いた。府教委設置者の怠慢なのか、公共施設の保全、管理者の責任なのか、何れにしても新設校と市内既設校との格差に唖然とさせられた。

性格上私は黙視できないのでその日の午後佐野事務長を伴い府教委に出向き、吉田管理部長に面談し、山城高校の校舎施設の破損状況、対応を陳情した。管理部長は穏やかに応対され「後日対応策を返事する」とのことであった。四月連休直前吉田管理部長が係官を伴い来校され、そして「先日の吉谷校長の要望内容は十分承知した。本日取り敢えず一億円の予算令達書を持参した。八月下旬までに補修工事、備品調達するよう担当者と協議実施されたい・・・」と回答、鮮やかな行政決定であった。その内容は（一）本館一階廊下のタイル張替（二）校長室、応接室の補修。（三）女子教職員用トイレ新築（四）全、定全教員用机・椅子をスチール製に新調。（五）全日制教職員室に更衣ロッカーを設置。（六）本館、南館教室の窓框修理工事。（七）本館、全教室のカーテン新調等々であった。

（二）京三中・山城高創立七十周年記念事業のこと

昭和五十二年四月の連休明けのころ、同窓会役員各位が来校され、校長室で記念事業が協議された。副会長村田香風さんを議長に協議、次の事項が決まったと記憶している。

- 一、会員名簿を昭和五十四年に発刊するよう作業中である。

- 二、記念式典は質素に行う。

三、生徒、保護者対象記念講演会を実施する。

講師藤林益三（前、最高裁長官） 三中十六回 卒業生。

四、中校舎（木造）改築された場合は中庭に記念庭園を造る。

五、初代校長中野省吾先生の胸像を校長室の東側に移転し周りを造園する。

（三）高校進学率の上昇と府行政の対応

終戦、貧困を経て復員後の出産ブーム。予想外の朝鮮戦争による軍需景気、続いて経済の高度成長に支えられた我が国は、昭和四十五年ごろから高校の進学率が上昇してきた。私の記憶によると昭和五十年ごろの進学率が全国平均五十%、大都市周辺の府県では七十～八十%に上昇し、その対応に苦慮していた。上昇に拍車をかけたのは労働省の学卒別初任給与体系の影響も考えられる。

本府でも府南部地域の発展に伴い八幡、城陽高を始めとして約十校の府立新設校が年次的に計画されていた。また市内でも昭和五十一年には北嵯峨が新設され、続いて洛西、洛水、北稜の開校が計画されていた。しかし、これだけの措置では市内中心部の進学率解消には役立たず、市内既設校の規模を一学年十学級（一校三十学級）一クラス生徒五十名定員になった。山城

高校でも昭和五十三年より一学年十学級（普六、商四）、完成年度には全日制三十学級、生徒数一、五〇〇名、に改められることになった。このため中校舎（木造校舎）を撤去し、跡地に四階建校舎が新築されることになった。

（四）校舎改築に伴う埋蔵文化財調査

昭和五十二年十月ごろ、職員会議で次年度入学定員、中校舎改築、建築に伴う埋蔵文化財調査などについて意見交換を行った。文化財調査は朱雀高に続いて一月ごろから開始、三月には終了、四月より中校舎建築工事開始の予定であった。会議終了後、ある社会科教員（氏名は忘れた）が「形式的調査では済まなくなるだろう。金閣寺、船岡山が近いので平安貴族の別荘地跡が出て来たら大変・・・」と冗談話しもあった。後日行政担当者に話したところ、「朱雀高は可能性があるが、山城は大丈夫。もし文化財が出ても記録保存程度でしょう・・・」と笑い話だった。

十一月に入り中校舎撤去、続いてプール、格技場、クラブ撤去され、一月から文化財調査が開始された。そして翌年三月始め、調査もそろそろ終わりのと思っていたところ、急に調査作業が終了された堰溝に山砂が搬入され始めた。府教委担当者の説明によると、府埋蔵文化財保護委員会の決定によると「建築予

定地は平安朝時代の貴族「源融」の邸宅跡、永久保存」とのことであった。

(五) 埋蔵文化財永久保存決定に伴い校舎建築場所の変更

六月府議会への予算要求のため、府教委は、山城高増築校舎の位置を校地の最西側（旧高蚕跡地、府営住宅に沿った処）に変更決定した。このような府教委決定に私は（校務を司る校長として）反対した。この場所は学校本館、教員室他の教室棟、体育館から離れていて（約百米）夜間定時制及び難聴生徒受入れ校として了承出来ぬ条件と考えた。行政としては提案予算を消化すれば一件落着かも知れぬが、校務処理、将来責任を負う校長としては了承できなかった。地震、火災など災害時に、全日制、定時制教職員生徒の安全、健康保持に支障あることについては再考すべきと府教委に要請した。

六月に入り私は校地の全面移転を提案し、北区衣笠山公園に山城高校を移してはと考え現地視察もしたが協議題にならなかった。

(六) 校舎改築に関する最終会議。そして解決

公的予算の決定。執行は年度ごとに行われるのが日本の制度である。したがって、前年六月府議会で決定した山城高増築予

算は六月に工事開始しないと不用予算の枠に入ることになる。したがって府教委は面子にかけても着工したかったようだ。五月初旬最後の協議が開かれるので私は渡辺教頭、佐野事務長を伴い府教委に出向いた。私は校長職務の最終日と考え引き出しの中に収めて在った辞表を出し、上衣の内ポケットに入れて会議に臨んだ。教育庁玄関に出迎えた城戸指導部長が別室に誘い入れて小声で、「吉谷先生は京都府公立校校長会会長です。内ポケットの物を出されると政治問題化し、教育長も辞職せねばならぬことになる。十分ご配慮下さい・・・」私の性格、心情を察知しての城戸指導部長の思いやりであろう。

会議での主張は従前通り一時間程度で決裂し、私は学校に立ち帰った。校長室で一服していると、先程会議に参加していた府教委管理課長から電話があり「只今よりお伺いしたい・・・」とのこと。程なく来校、そして課長が「あのような結果に終わりに残念です。しかし吉谷校長先生は何か言い足りない口振りに思えました。何でしょうか。今は会議ではありませんから遠慮なく話して下さい・・・」と述べて呉れた。私は日ごろ考えていたことを述べ「この条件を呑んで頂ければ西館建築工事は了承する」と話し条件①北館（理科室棟）に続いてしし教室を、次ぎに家庭科教室を、そして本館（教員室、図書室、保健室）北館、西館を外廊下で結ぶ②中庭にテニスコート（夜間照明）

を設け定時制利用可能③西館と教室棟（南館）の間に定時制用簡易食堂設置等々を話した。管理課長は「原則的に了解。持ち帰って善処します・・・」と述べ「助かった・・・」と礼をのべ帰庁した。

（七）懸案事項が解決し山城高校の職務を終わる

私の山城高校在職は僅か三年であつたが、振り返ってみると十年以上在職していたような感覚がある。それは問題点が多岐に分かれていたことと、在職中私は校務以外に京都府公立校長会会長に選任されていたこと、加えて全国高等学校校長協会副会長に選任され、東京、他府県、府内出張が多岐であつたためである。公務調整処理は井上教頭、渡辺教頭に一任、定時制は肥子教頭に一任。誠に迷惑を掛け申し訳なく思っていた。在任後半に定時制教育実習問題が起こり、京大岡本学長、教育学部長峰谷先生にも多大の迷惑をかけたことをお詫びします。定時制教員から校長への謝罪があり、円満解決したので学校に傷がつかなかったことは幸いであつた。



山梗 14 图 同本图